戦後プロテスタント･キリスト者における宣教の模索と変革[1]
―社会的宣教活動者の実践・思想・霊性―

大　倉　一　郎

1．戦後プロテスタント・キリスト者の宣教の模索―問題の所在―

土肥昭夫は、戦後日本プロテスタント史における一九六〇年代に関して、「その歩みをひとことでいえば、キリスト教は戦前の体質をそのままにして、戦後改革に応じて制度、機構の再編を行い、戦後の多様な動きと共にさまざまな活動を行い、いろいろな問題をかかえつつも、それなりに順調な歩みをしてきたが、六〇年代末になって大きな転換期を迎えることになった」（土肥, 2004, p.414）と指摘している。六〇年代とは、土肥の言う「大きな転換期」に立ち向かうプロテスタント・キリスト者の姿が、社会的課題に参与する宣教活動の実践において現れ始めた時代であり、その思想においても主体的かつ批判的に取り組む方向を明確にしていった時代であると考えられる[2]。その背景には一九四〇年代の国家総動員体制下において日本基督教団に集約的に露わになった日本のプロテスタント教会の問題性に対する戦後の真摯な反省、具体的には「第二次世界大戦下における日本基督教団の戦争責任の告白」（以下「教団戦責告白」）（一九六七年）に至るような歴史的な自己反省の軌跡があった。

戦後、戦時下の国家総動員体制に妥協を重ねた日本基督教団をめぐる検証は、一方で教会の信仰と倫理をめぐる神学思想的な反省を追求していったが、他方では教会の歴史的・社会的体質に対する宣教論的な反省に道を開いて行った。それは、國安敬三によれば、「第二次大戦後の思想的空白の中で起こったキリスト教ブームの時代（一九五〇年頃まで）から、その反省期に入って教会形成が中心課題になり、更にブームが去って見ると福音はいっこうに社会に浸透していないという現実の中で、社会大衆への福音の浸透ということが問題となる」（國安, 1992, p.84）という経過をたどった。國安の指摘した問題に関わる当時の対応ともいうべき動きとしては、一九六一年の「日本基督教団宣教基本方策」制定によ

る宣教活動の方向づけがなされていた。その一つの焦点は「大衆の生活に対して共同の責任を負う」ための「教会の体質改善」であると謳われた（國安, 1992, p.85）。その宣教基本方策が改善を求めた教会の体質とは、日本のプロテスタント教会が持っていた戦前からの社会的性格と、そこに成立したキリスト者の生活の座から生まれる思想性の歴史的変革に関っていたといえるであろう。

ところで戦前の日本のプロテスタント・キリスト教の社会的性格に関して、木田献一は「天皇の絶対主義的支配と対外的拡張主義を前提とした上で、国内的民主化の下に、ホワイトカラーの階層における内面生活の諸問題を主たる課題とする文化主義的・教養主義的キリスト教」（木田, 1999, p.52）だったと総括する。いわば戦前の日本のプロテスタント教会は総じて戦時下の天皇制支配の圧力に抗する力量を、その社会的性格に規定されて自らの政治的・思想的条件としてもおおよそ欠いていたのである。このようなプロテスタント教会の性格は教会の社会的視座にも位相を変えて反映していた。原誠は、戦前、とくに十五年戦争下に顕著に現れた日本プロテスタント・キリスト者の思想的特徴に関して、彼らの思想における民衆や少数者や異質な人々の不在を検証して、「すなわち他者という存在への認識と視点、すなわちキリスト教信仰を、神と自己、そして自己と他者、すなわち「隣人」との「関係」の中で形成していく神学の論理がまったく欠落していることが指摘できる。」（原, 2005, p.67）という。木田と原の両者が指摘するのは、戦前の日本のプロテスタント教会の社会的性格とその思想性の表裏一体をなす相貌であったと理解していいであろう。

以上のような教会の社会的・思想的状況の中に一九六〇年代に入って、社会的課題に深く関与した一群のプロテスタント・キリスト者が活動に着いて行った。それらのキリスト者は、戦前・戦中を通じた日本プロテスタント教会の社会的性格と思想性の限界をすでに認識していたし、それ故、その変革の道を模索することは宣教の根幹に関わる課題だという認識をそれぞれの宣教の実践の中で一層深める体験を重ねて行ったのである。しかし、それらの宣教の担い手たちの実践と経験、そこから生まれた言説と思想は、いまだその多くは解明されてはいないというのが現状であろう。それらの解明を図ることは、日本プロテスタント宣教史の研究にとって重要なテーマとなり得るのではないだろうか。とくにそれぞれの宣教者個人の営みに即した解明は、研究の上で一つの大きな問題群をなしている

と考える。

2．「宣教者の探求」・「批判的な姿勢」・「霊性」―本論文の目的と方法―

本論文は日本のプロテスタント・キリスト者が戦後社会において展開してきた宣教活動をめぐって、とくに戦後日本の社会的課題と関わって活動を担ったキリスト者の実践と思想とを明らかにすることを目的としている。一九六〇年代は日本のプロテスタント教会が戦後の社会動向の中で自らの戦後宣教の方向に関わる言説を広範に論じ始めた時代であった。それと共にそれらの言説を担った主体として戦後に宣教の現場に赴いたキリスト者たちが広く活躍し始めた時代であった。本論文では主に一九六〇年代から活躍を認められる主として日本基督教団の何人かの教職者を注目して、ほぼ二〇〇〇年代までを視野において考察する。しかし、筆者の現在の知見と用い得た資料等の制約によって本稿の以下の考察はごく限られた人物と社会領域に関する取り組みとならざるをえない。

その序論的作業として、とくに課題とすべきことがある。これらのキリスト者たちの実体をよりよく捉えるためには、実践と思想との二元並列的記述に終わることなく、彼らの丸ごとの言行を切り離さない記述をする方法が求められていると考えられることである。本稿が関心を寄せたキリスト者たちはその宣教活動の実践体験と思想とを分離して考察すれば、その人の実体の把握はほとんど望み得ない人々だと考えてよい。これらの人々は宣教の現場で実践的活動に生涯の多くを傾けた人々であり、その思想の営みも繰り返し実践への志向において試みた人々だからである。それゆえ、この研究においてはこれらの人々の実体をよりよく捉えるために、思想と実践との分離的、あるいは二元並列的記述に終わることなく、彼らの言行を丸ごとひとつの連関として記述をする方法が求められていると考える。

そのための方法的課題として、韓国民衆神学者を論じるにあたって朴聖焌がその研究で試みた「神学者の探求」と名づけた方法は貴重な示唆を与える。朴によれば、神学者の探求とは、研究者が考察の対象とする神学者の実体を明らかに捉えるために「神学者の個人史と特異な人格と個性、そしてそれと無関係ではない彼らの神学的遍歴を資料が許す限り追跡」することであるという（朴, 1997, p.7)。

朴の用いた方法は、あるいは「宣教者の探求」においてもまた実体に近づく記述のための有効な一つの方法を示唆しているものと考える。

しかし、「宣教者の探求」にあたっては、その固有の性格があることも考慮しなければならない。すなわち、本論文が取り上げた上述のキリスト者たちは、おおよそ職業的な意味での神学者ではなく、教会に依拠した宣教の現場で実践的活動に生涯の多くを傾けた人々であり、その思想も繰り返し実践への摸索の過程として表現したものであったといえるだろう。その意味で、その思想はグスタボ＝グティエレスの表現を借りて言えば、「正統な行い（orthopraxis）」の意味を真剣に受けとめることで、「神学とは、省察、すなわち、批判的な姿勢である。神学は後に従う、いわば、第二のステップである」（Gutierrez, 1988, pp.8-9）という、省察としての思考のプロセスを、言わずもがな、それぞれの個性と社会性において辿った人々であるといえる。

そのように理解し得るならば、朴の「神学者の探求」は可能性に富んだ方法として「宣教者の探求」においても援用すべきことに異論はない。しかし本論文が取り上げた社会的宣教活動者たちの実体の解明にあたっては、彼らの実践と思想との性格に即した解明方法を手にするために、さらにもう一つの視点が欠かせないと考える。つまり社会的宣教活動者の場合、神学、あるいはそれをも抱合する意味で思想の営みは、実践に向けられ、次の実践を展望する「省察、すなわち、批判的な姿勢」としての性格を強くしているという点である。したがって彼らの「批判的な姿勢」の解明がその実体の把握にとっていっそう重要になってくると考えていいだろう。

ここで結論を先取りしていえば、その批判的な姿勢は「霊性」として理解できる事柄であると考える。ただし、この場合、霊性とは荒井献の定義の意味である[3]。荒井は初期キリスト教に関してルカ文書を中心にその霊性を検討して、暫定的と断りつつ次のように定義する。「霊性とは、イエス・キリストを介して働きかける神の霊に応答し、人間の身体的・精神的・社会的領域をダイナミックに根底的に支える次元〈スピリチュアリティ〉に即して形成される生のあり方」（荒井, 2009, pp.4-5）である。荒井のいう「イエス・キリストを介して」ということは、具体的には福音書のイエスの言行の解釈によって形成される知を参照するという営みであろう。その営みを神の霊の働きとして受けとめ、人間の身体的・精神的・

社会的領域にかかわる諸経験をふりかえりつつ形成される生き方がキリスト者の霊性であると考えられる。荒井の指摘する霊性は聖書的典拠を重視するプロテスタント・キリスト者の姿勢を理解するにあたって、とくに適切な解釈学的視点であると思われる。

他方、本論文が取り上げた社会的宣教活動者たちには、その社会との向き合い方には当時の社会的分断の状況に積極的な抵抗をもって臨むという視座が共通に見出される。それは換言すれば、資本と権力による戦後社会の分断に抗するのに、人間と人間との連帯をもって対峙するという視座が共有されていたということである。その視座に立って彼らが宣教活動において、福音書のイエスの言行の解釈によって形成される知を繰り返し参照しながら、そこで聴きとったメッセージを神の霊の働きとして受けとめ、実践と省察を営んだことが分かる。まさにその意味での実践の批判的な省察が、実践と思想の連関の結節点にあったのである。それは荒井の定義した意味での「霊性」を生きる姿であるといっていいであろう。この理解に基づいて本論文研究の方法を設定したい。それは宣教者の個性と社会性を視野においた個々人の霊性の考察という方法である。その方法に基づく考察を通じて、戦後日本のプロテスタント・キリスト者、なかんずく社会的宣教活動実践者たちの実体をより一層明らかにすることが期待できると考える。

ともあれ、本稿においては個々の宣教者について論じるに先だって、これらの人々の宣教者としての姿をひとつの群像として、彼らが生きた時代との関連において概観することにする。そのことによって一九六〇年代からのプロテスタント・キリスト者たちの社会的宣教における様々な模索と変革の営みに共通する課題と基本的な特色を素描してみたい。

3．社会的宣教活動を担ったキリスト者と宣教の視座

日本のプロテスタント・キリスト者が、一九六〇年代に至って、その社会的課題に取り組む宣教の現場にたち、そこでの実践の経験を宣教の課題として発信するようになった背景には、教会とキリスト者自身の歴史的振る舞いと神学的反省の深化とともに、当時の日本社会がキリスト者に実践活動を強く促した社会的・政治的状況を注目する必要がある。一九五〇年代の日本社会はアジア・太平洋戦

争の敗戦から戦後日本社会が再建を図る準備期間であった。一九六〇年代に至って日本は経済的な成長期に入ったのであったが、同時にこの時期はその成長の負の側面が次第に明らかに露呈し始め、様々な社会問題が生じていった過程でもあった。

歴史家荒川章三は一九六〇年代以降の日本社会を論じるにあたって、当時の社会の構造的状況を以下の点に見ている。それは経済成長の豊かさと表裏一体に進行した「社会の分断」の状況であった（荒川, 2009, pp.14-15）。荒川はその社会の分断状況を三つの位相で指摘する。第一の分断は、性別や健康・民族的出自など個人を越えた属性による切り分けである。第二の分断は、地域や産業による切り分けで、国土総合開発の時代と称されながら、特定地域の開発のために別の地域がスクラップ化され、開発対象外の産業はリストラされた。第三の分断は、平和国家を謳う戦後日本に巨大な軍事空間が、沖縄と本土の米軍基地及び自衛隊において維持されたことである。いわば平和の実現に対する分断であった。一九六〇年代から活動を始めたキリスト者の活動は、個々のキリスト者の固有の現場や問題意識によって決して一様ではないが、荒川の指摘する三つの社会的分断における諸問題のいずれかに、あるいはいずれにも複合的に関わって展開したものとして眺望することができるであろう。

荒川の指摘した社会分断の三つの位相に関わって行ったキリスト者とその宣教活動を、以下に個別の事例によって取り上げてみる。なお本稿で注目するのは、同時代に活動した人々の中でもあくまでも限られた数名の人々の場合をとりあげるものである。さらにキリスト者の社会的活動は一九六〇年代から突如として始まったわけではない。むしろ多くの場合、幾多の先駆的な人々の働きがあり、その直接・間接の影響や継承が様々な形であったと見るべきである。そのようなキリスト者たちの働きを先駆として一九六〇年代に入ると、新たなキリスト者の活動が開始されているのである。

三つの社会的分断線に即して述べるならば、第一の課題に関わる宣教活動として、関田寛雄の川崎市戸手伝道所での「教団戦責告白」の実質化を目指した実践があげられる。関田の宣教活動は一九五五年からであったが、一九六〇年代を通じて宣教論の課題としての認識を深化していった。関田は関東における在日コリアンの多住地域であった川崎市桜本地区で伝道を開始し、地域の在日コリアンと

の出会いを積み重ねた現場の体験を踏まえて、一九六七年の「教団戦責告白」のもつ宣教論的重要性を洞察した。とくに在日大韓基督教会川崎牧師であった李仁夏との連帯を軸として、一九七〇年には在日コリアン二世の青年に対する日立製作所による就職差別撤廃法廷闘争などを通じて民族差別を問う活動に積極的に関わっていった。関田は日本基督教団の教会形成を自己批判的に担う願いを抱いて、川崎市内のもう一つの在日コリアン多住地域だった戸手地区に川崎戸手伝道所を開設し、宣教の基本方針に「教団戦責告白の実質化」という立場を明示した。その後も長年に渡って川崎市における在日コリアンとの市民的連帯運動を担い続けた。それらの実践の経験に依りつつ「戦責告白の実質化」を実現することを目指す宣教論を主張した（関田, 2003, pp.320-325）。

第二の課題に関わる宣教の働きとして、犬養光博が、一九六五年、筑豊地方福吉地域での宣教を開始している。犬養は同志社大学神学部在学中に六〇年安保闘争に参加して日本社会が危機的な状況にあると考えるに至った。その最中に炭鉱閉山後の筑豊の民衆の困窮に直接に触れる体験をした。犬養は筑豊地域の窮乏は国策的な切り捨てによる結果であり、民衆を惨状に追い込んでいると理解した。犬養は大学院修了とともに福吉地域に移り住んだ。福吉伝道所牧師、また労働者として自活しながら同地を拠点とした犬養の試行錯誤の粘り強い働きは四〇年間を越え、その取り組みは荒川の指摘した社会的分断の様々な状況に対する複合的な闘いとして展開していった[4]。その実践を振り返りながら、犬養は民衆を救援や教化のために対象化するそれまでの教会の宣教論を批判的に捉え直し、民衆を宣教の主体と考える宣教論を打ち出していった（犬養, 1998, (上), p.324）。

金井愛明は、一九六七年、大阪の釜ヶ崎において労働者への宣教に着手している。翌一九六八年に釜ヶ崎の宣教に加わった小柳伸顕によれば、金井は同志社大学神学部、同大学院に学んだ後、関西労働者伝道委員会の専任者となったが、労働運動に関わる中で釜ケ崎の労働者に出会い、その強いられた処遇格差に気づいて釜ケ崎に入って、自らも労働者として働く体験を経ながら宣教活動を行っていった。金井は、労働問題の社会的背景に対する経験と見識に裏づけられて、出会った労働者の生と尊厳を支える実践活動に就いて、その働きに生涯をおくるに至る。そこには苦しむ労働者への深い共感が窺われる（小柳, 2009, pp. 218- 220）。

小柳伸顕は、同志社大学院生時代から関西労伝インターンの経験を積み重ね、

一九六八年に釜ヶ崎の大阪市立愛隣小学校ケースワーカーとして就職した。同時に教団西成教会からの派遣という立場で釜ヶ崎の宣教に加わった。小柳は釜ヶ崎の子どもたちの学習支援から活動を開始したが、多くの通学困難児童の背後にある保護者の過酷な労働と生活の現状を理解するようになり、彼の活動を労働者支援に展開していった。小柳の宣教の姿勢よく示しているのは次の行動であろう。一九七〇年に釜ヶ崎で活動するキリスト者たちは釜ヶ崎協友会を結成した。カトリック、プロテスタントを含むキリスト者の集まりだったが、エキュメニカル運動として教派間の友好を目的としたのではない。それぞれの活動の特色を生かしながら釜ヶ崎で生きる人々の直面する問題に取り組むことを最も重視した（協友会 40 年誌編集員会, 2011, p.79）。小柳は同会の結成に集った一人であった。

伊藤之雄は、一九六七年、牧師でありつつ労働者として働くことから山谷宣教の途をさぐった。山谷に関わる宣教には中森幾之進、戸村政博といった牧師たちの先駆的働きがすでに見られたが、伊藤は自ら労働者としての生活をも体験するという関わりを試みた。その経験を通じて、伊藤は山谷労働者を宣教の対象として見る温情主義的姿勢ではなく、日本のプロテスタント教会と彼自身を含めたキリスト者の中産階級的生活と精神性を深く自己批判的に省察して（伊藤, 1967, p.86-88）、宣教そのものの本質を問うラディカルな姿勢を獲得していった。しかし、伊藤は一九八〇年に病に倒れ道半ばで早世した。なお伊藤の惜しまれる早世以降にも、一九七〇年代からの山谷では文字通り一労働者として働き続け、仲間として労働者に関わるという菊池譲牧師の宣教の実践が生まれた。さらに一九八〇年代からの横浜寿町における活動を開始した渡辺英俊牧師の宣教活動は、移住労働者支援の運動を展開しながら伊藤の宣教思想の継承を明確に意識するものであった（渡辺, 2009, pp.233-234）。

第三の課題に関わる宣教活動の一つとして、岩井健作（当時、岩国教会牧師）による、一九六五年からの米軍基地撤去を求める反基地闘争がある。岩井は前任教会の呉山手教会時代からキリスト者の平和運動を実践していたが、岩国での反基地闘争は新たな実践体験をもたらすものだった。その反基地闘争は一九七〇年にはベトナム反戦運動に連動して行き、既存の反体制運動と一線を画してベトナム反戦の一点を共有課題として、党派や組合などの集団ではなく個としての市民の連帯を重んじる思想から基地内反戦米兵との国籍を越えた市民的連帯をも含む

広がりを見せた。指導党派や帰属集団中心のそれまでの日本の大衆運動と異なる個としての市民連帯の可能性を試みた運動の体験を通して、岩井はそれを宣教思想の問題として考えるようになる。それは宣教における個々の人間への傾聴と異質への柔軟な理解を重んじる岩井の宣教思想につながっていく（岩井, 2003, pp.1-3）。

図 1：本節で言及した主なキリスト者の一九六〇年代における宣教開始年譜
［（生年）―（現場での宣教開始年・現場）―（没年）］

伊藤之雄（1924）――――――――――――――――（1967・山谷）―（1980）
関田寛雄（1928）――――――――――（1955・桜本）――――――――――――――――
金井愛明（1931）――――――――――――（1965・釜ケ崎）――――――――（2007）
渡辺英俊（1933）――――――――――――――――――――――――（1987・寿町）―
岩井健作（1933）――――――――――――（1965・岩国）――――――――――――
小柳伸顕（1937）――――――――――――（1968・釜ケ崎）――――――――――
犬養光博（1939）――――――――――（1965・福吉）――――――――――――
菊池　譲（1941）――――――――――――――――――――（1979・山谷）――――――

以上、一九六〇年代に社会的実践を担う宣教活動に積極的に取り組んでいった幾人かのキリスト者たちの宣教活動を、三つの社会分断というパラダイムに関連づけて考察した。それぞれのキリスト者は世代や個性や神学的傾向などを異にしている。またそれぞれの実践は固有の現場で固有の課題と向き合うものであった。しかし、それと同時に注目すべきは、その向き合い方には当時の社会的分断の状況に積極的な抵抗をもって臨むという姿勢が共通に見出されることである。それは換言すれば、資本と権力による戦後社会の分断に抗するのに、人間と人間との連帯をもって対峙するという視座が、キリスト教宣教の思想の根底に広く共有されていたことを示しているというべきであろう。

4．社会的宣教活動を担ったキリスト者と宣教の思想

一九六〇年代の社会状況に深く関わって宣教活動を実践し始めた先のキリスト者たちが、その宣教思想の視座として人間の連帯という課題を担う選択をしたのはなぜであろうか。ここで注目すべきは、これらのキリスト者たちの記録を通じて、彼らが宣教の現場において先ず人間と出会っていたという事実である。例えば、犬養の筑豊宣教の記録には実に多くの人々との出会いと死の別れが繰り返し語られている。一九八一年の彼の著書は『弔旗―筑豊の一隅から』と題され、全編を通じて隣人―しかもキリスト者だけを注目するのではなく――の生と死の記憶である。その記録を通じて犬養の人との出会いと交わりに感動や敬愛の念を失わない彼の関心が示されている。宣教の現場で出会った人々を積極的に記憶し丁寧に記述することは、犬養のみならず釜ケ崎宣教を語る小柳にも共通する作風である。彼らの宣教の記憶には他者への深い関心とその尊厳への感性が一貫していたといえるだろう。

これらの出会いと交わりの体験を通じて、彼らは圧倒的に宣教の現場そのものにおいて思想形成の課題とインスピレーションを得たということができるであろう。換言していえば、宣教の現場での彼らは、その現場で出会った人々、つまり個別的かつ社会的な存在としての人々との関係において、それまでのアプリオリな宣教理解をふり返り、その批判的省察を蓄積しながら宣教の実践と思想を形成していったということである。この意味で彼らの宣教の思想は、思弁ための思想ではなかったし、それぞれの現場の文脈と乖離した体系化や抽象化には中心的な関心はもってはいない。その宣教の思想は固有の現場の問題を克服するための有効な実践を志向する文脈的宣教の思想であった。それゆえに個々の宣教者の個性が現れる思想でもある。幾つかの事例を考察してみたい。

第一は犬養の宣教の場合である。犬養の宣教実践における人間の出会いの体験は彼の思想を考える上で深い示唆を与える。犬養は筑豊宣教の七年目を迎えた一九七一年に彼の最初の著書を刊行した。『筑豊に生きて』と題されたその内容は犬養の情熱を傾けた宣教のレポートであり、その時点での宣教への考え方の表現でもあった。しかし犬養は後に自己批判をもってこの自著を絶版にしている。彼自身によれば、それは出版直後に体験した一つの出来事から彼が省察を深めた

結論であった。犬養が絶版を決めるに至る経過は次のようであった。同志社の先輩で前述の小柳から読後感が寄せられた。小柳は、本の中に登場する筑豊の人々がその固有の言葉遣いではなく、犬養の話す「大阪弁」によって語っていることを指摘して、この本の出版そのものに疑問を投げかけたのである。犬養は小柳の指摘を重要な指摘と受けとめて、大阪弁とは彼自身のもつ「都会育ちであるとか、大学出であるとか、クリスチャンであるとか、牧師であるとか、男であるとか、そういった諸々のぼくの持っている枠組みの総称だと知らされた。自分の枠組みでしか対象をとらえていない」（犬養, 2009, p.104）とふり返っている。そしてそのことの無自覚が問題だと考えた。宣教活動における他者との出会いの体験について、犬養の批判的省察の姿勢が如実に現れている。絶版を決めるに至る体験は犬養が異質な他者との出会いにおいて自己自身を相対化して自覚する宣教実践の経験となったのである。

上述のような出会いにおける経験を意識化しながら、犬養は社会的参与を貫く宣教の実践、さらに無教会派の指導者で聖書研究者であった高橋三郎の思想と取り組みながら、犬養自身の思想を変革して行った。彼は民衆をキリスト教の倫理的要請に基づく救援の単なる対象と見做す考えや、キリスト教信仰に帰依することを求める教化のための単なる対象とする考えを脱出していく。民衆はその出会いの中にキリスト者がイエスに出会う経験を与える人々であり、キリスト者であることの意味をも学ぶ協働者ともいえる人々である。その意味で民衆とは宣教の対象であるというより、宣教の主体なのである。民衆の中にイエス・キリストの出来事が生起するならば、キリスト者の宣教とはその出来事の証言を行うことである。犬養は二〇一一年に四七年間に及んだ筑豊宣教を福吉伝道所の閉鎖をもって締めくくっているが、その三年前に自らのそれまでの宣教の総括ともいえる言葉を残している。「教会は、宣教する場所ではなく、イエス・キリストの出来事が起こっている場所である。そこにテント掛けしてでも、居させていただき、出来事がなくなったら、テントをたためば良いと思っている」（犬養, 2009, p.128）。犬養の宣教思想の核心を語る言葉であろう。

第二に伊藤の場合である。伊藤の山谷宣教の思想においては、現場の問題の克服のための射程は社会全体の体制変革と言う課題との関連を強く意識したものであった。彼はその著『神なき時代』において自らの山谷宣教の実践を省察して、

彼の生きる時代を「人間観の大きな転換の時代」ととらえ、キリスト教への問題提起を試みた（伊藤, 1967, p.3）。伊藤は転換期の人間観を問う重要な思想としてマルクスの思想に注目した。伊藤はマルクスの思想の真の目的は人間の精神的解放にあると見做し、経済が人間の生を決定する事実ゆえにマルクスは経済的鎖からの人間の解放を主張したのだととらえた。キリスト教の存在の意味が問われているのはマルクスの指摘する人間の解放の思想に関わってのことであった。つまり問いの中心にあるのは、現代のキリスト教が人間を社会全体の中で見ることを欠落させている傾向の中で、現代社会で苦しむ人間の解放にいったい何を告げ、どのように行動し得るのかという問題意識であった。それは言い換えれば、社会の体制変革をも視界におきながら、人間の全的解放の課題のもとに教会の宣教を批判的に問う思想であったといえる。

伊藤は牧師として宣教の現場でその教会と宣教への問いを自問した。そこで彼は自分の活動が教会の多数を占める中産階級の精神的な慰藉の役割へと埋没していく現実を認め、その具体的な克服のための実践をめざして自ら山谷に着いた。そこで山谷労働者の仕事を体験し、労働運動に関わり、労働者と共に聖書を読み、労働運動を行うマルクス主義者との対話と労働者の権利のための協働活動を試みた。このように活動した伊藤の思想には山谷労働者を宣教の対象として見る温情主義は無縁であったといえる。資本主義の人間疎外は全ての人を含むものとして、全ての人がそこからの解放を必要としているからである。伊藤は彼自身を傍観者として労働者に回心することをせまる宣教は人間の現実に対する偽りであると考えていた。彼は人間疎外の苦悩を強いられた労働者への痛苦の思いと、その中でなお屈することなく生きようとする労働者の人間性への驚きと畏敬の念をいだいた体験を記録している。同時に彼自身を含めた日本のプロテスタント教会の中産階級的性格からくる精神性を深く自己批判を込めて省察している。彼の場合、教会と宣教を問い返す姿勢は妥協を許さないまでの自己批判であった。彼が自分の生活の中に山谷労働者の一面と並行して大学教員でもあるという事実をもち、後者の生活は一つの典型的な日本のプロテスタント・キリスト者の社会層のものであったという自覚が、一層彼の葛藤を深くして峻烈な自己批判と実践行動を支えたと考えられる。伊藤の宣教の思想は資本主義社会に生きる彼自身の社会性を見すえたラディカルな自己省察によって裏付けられていたのである。

第三に岩井の場合である。彼は一九五〇年代以来、学生運動・労働運動・市民運動に深く参与してきた経験を通じて、宣教における社会的なものに対する教会の思惟構造を問いかけてきた。とくに彼は反米軍基地闘争の中で六〇年代末には個人の主体的な参加に基づく「ベトナムに平和を市民連合」の運動を岩国で主導した市民の一人としての経験を持っていた。その経験を通じて組織的思想統一で成員を囲い込む当時の既存の社会運動と、個別の課題に応じて自由意思に基づいた個人同士の連帯を重んじる市民的社会運動との違いを深く理解した。その背景に裏付けられて、キリスト教会が宣教において社会に関わるときの思惟構造を問いかけたのである。

具体的にいえば、日本基督教団が一九六六年に「社会活動基本方針」によって表明した社会活動への宣教論的指針について、岩井はその思惟構造の問題を次のように指摘している。「神学的課題から現実問題を照射していくという構成の仕方で…（中略）…観念と現実との逆転が起きます」（岩井 , 2003, p.1）。このような思惟構造に拠るかぎり、教会の宣教活動は市民の社会的活動に接点を持ちえないというのが岩井の指摘であった。なぜなら市民の運動は理念やスローガンから生まれるのではなく、人間生活の個々の現場から生まれるからである。彼はこの人間の生の現場の事実を真摯に受けとめることが先行しなければならないと考えたのである。岩井は、教会が「信仰告白共同体」という理念集団の一面を属性としていることを否定しない。しかし、その属性のゆえに理念的一体化を図り個人の自由を縛ることが、ついに真実な人間同士の繋がりを求める生き方への躓きともなり得ることを指摘したのである。

5．実践と省察の霊性の解明へ―結語にかえて―

以上、三人の宣教者の思想を考察した。前節に述べたように彼らはその宣教の現場での人との出会いを重く受けとめて、そこから宣教の実践を試み、その省察を深化して行った。そこにはほぼ共通する思想的課題が立ち現れて行ったと思われる。第一に戦後日本社会の分断の矛盾と苦難を強いられた人々に対する、宣教者自身の、さらにキリスト教会の、歴史的・社会的関係性を問い直すという課題であった。第二に人々の苦難と社会の歪みを克服するべく人間の連帯に開かれた

キリスト教宣教活動はどのようにありえるのかを問い直すという課題であった。第三にキリスト教信仰の意味そのものを日本社会の現実の中であらためて考察してみるという課題であった。それらの課題のゆえ彼らは実践の批判的省察と思想変革を模索したといえるだろう。その模索を通じて苦難を負う人々との絆を形成する協働の営みが、戦後社会の分断に抗する闘いの根本に他ならないとの視座と思想を鍛えあげていった。そして人々に強いられる分断に抗して人間同士を結ぶ社会的連帯のために生きて働く知恵と実践としてキリスト教宣教の意味を見いだしたのである。それは戦後日本のキリスト者が時には教会の既存の制度的枠組みや従来の通念と緊張を孕んでも、日本社会の分断の克服と人間の連帯という課題を人々と共に分かち合う姿に他ならなかったのである[5]。

一九六〇年代から社会的課題に深く関与したプロテスタント・キリスト者の宣教の実体験を通じて生まれた実践知というものを象徴的に語っている一つの言葉がある。二〇〇一年に関西神学塾の宣教学の講師でもあった岩井は、彼の宣教学の講義録の冒頭に、宣教とは彼にとって何であったかを半世紀に及ぶ経験と省察に立って、簡潔に次のように表現した。「（宣教とは：筆者）共に生きること」である（岩井, 2002, p.1）。岩井は「共に生きること」を、一方で人間の歴史の時空の広がりの中に見出し得るものであり、他方で人間の歴史の時空では見いだし得ないものと説明している。いわば社会的実践の経験知とキリスト教信仰の神学知との双方向からの洞察を切り離すことなくこの言葉を語ったのである。

岩井のこのような洞察が社会的現実の中で真剣に受けとめられるならば、両者の知は鋭い緊張関係にあり、岩井のみならず多くのキリスト者にとって、自らの実践と思想に対する大きな挑戦となるといえるであろう。その挑戦的な課題を担いながら社会的宣教活動の一歩一歩を進めようと試みてきた人々が存在してきた。それが、日本プロテスタント教会の長きに渡る社会的・思想的限界を打ち破り、その克服を図ろうと模索してきた一九六〇年代から社会的課題に深く関与し続けた宣教の担い手たちである。その意味で岩井の見いだした「共に生きること」という言葉の背後には、彼らの多くが到達した日本宣教の知と思想が豊かに蓄積されているといえるだろう。ところで、岩井が自らの宣教の実践をふり返りながら、宣教とは「共に生きること」であると表現した言説を注目したい。それは彼の霊性を物語っているのである。つまりさらに正確に言えば、そこには「共生の

霊性」と名づけ得る霊性を認め得るであろう。このことの認識から新たな研究の課題が予想される。それは宣教者の個性と社会性を視野においた個々人の霊性の考察という課題である。

註

1　本稿は『農村伝道神学校紀要第 27 号』(2012 年 5 月 1 日) 所収の拙稿「プロテスタント・キリスト者と戦後社会―社会的宣教者の実践・思想・霊性をめぐる一考察―」、及びキリスト教史学会関東部会（2012 年 12 月 9 日）における口頭発表に基づいて改稿・増補した論考である。

2　一九五〇年代を通じて、日本のキリスト者は平和・反戦・日本国憲法護持などの立場から浅野順一、大村勇、井上良雄、北森嘉蔵などが名を連ねて「キリスト者平和の会」を中心とする運動を展開した。六〇年代に入ると、キリスト者の平和運動はさらに活発化し、連合組織「日本キリスト者平和の会（日キ平)」に発展するが、井上良雄と飯島宗享の間で、平和運動を教会の営みとして信仰に直結する前者の立場と、信仰に立ちつつ多様な運動の可能性を認め社会科学的視点の必要を説く後者の立場が論争を闘わせた。キリスト者の社会参与における思想的主体性の明確化を試みる動きだったといえるだろう。

3　キリスト教霊性は、伝統的霊性神学ではもっぱら個人の内面的経験や宗教的敬虔などにのみ関わると見做されてきた。しかし、Dorr などの現代の霊性神学者は、霊性が社会に開かれた行動性や人間の全体に関わる機能性を有する側面を再発見している（Dorr, 1985, pp.15-16)。荒井献による霊性の定義も聖書学の見地からイエスに倣うものとしてのキリスト教霊性が人間の生の全領域に関わっていることを指摘しているのである。

4　犬養の宣教は筑豊地域の貧しい人々との関係に基盤をおきながらも、半世紀の間に反公害、民族差別撤廃、アジア民衆連帯の闘いと関与を重層化していくことが分かる。それは荒川の社会的分断の三局面に関連する様々な状況に対する闘いとなっており、その意味で複合的な闘いと呼び得る（犬養, 1998, (下), pp.3-4)。

5　社会的活動における人間の尊厳ある連帯という課題は、社会正義の追求とケアの倫理の均衡という設定で、今日なお課題と見なされている。倫理学者川本隆史は近著において「共に生きるという課題に立ち向かうためには、集計された財（豊かさ）の分配を論究するマクロ的なアプローチと、目の前に苦しんでいる他者にどう応対すべきかを考え抜くミクロ的なアプローチとの両者を使いこなさねばなりません。」（川本, 2008, p.44）と指摘している。

引用・参考文献

―荒井献. (2009).『初期キリスト教の霊性―宣教・女性・異端』岩波書店。
―伊藤之雄. (1967).『神なき時代』日本 YMCA 同盟出版部。
―伊藤之雄. (1967, 第 5 刷 = 1975.).「キリスト教とマルクス主義」, ハンス = リルエ『無神論　ヒューマニズム　キリスト教』日本 YMCA 同盟出版部。
―犬養光博. (1998).『析出する祈り―犬養光博発言集―（上)』告発する会。
―犬養光博. (1998).『析出する祈り―犬養光博発言集―（下)』告発する会。
―犬養光博. (2009).「おらぶ神、黙す神」,『低きに立つ神』コイノニア社。
―岩井健作. (2007).「所与としてのキリスト教」,『よく生き、よく死ぬために』　関西神学塾。

―岩井健作.(2007).「このとき、歴史に向き合う―戦争責任告白をどう生きるか―」,『福音と世界　12 月号』新教出版社。
―岩井健作.(2003).「‘市民’運動と宣教」,『「岩井健作」の宣教学（23)』 関西神学塾講義録（未刊)。
―川本隆史.(2008).『哲学塾　共生から』岩波書店。
―木田献一.(1999).「教団 50 年史と聖書神学」, 雨宮栄一・森岡巌　編『日本基督教団 50 年史の諸問題』新教出版社。
―協友会 40 年誌編集員会.(2011).『釜ヶ崎キリスト教協友会 40 年誌』釜ヶ崎キリスト教協友会。
―國安敬二.(1999).「宣教論から見た教団」, 雨宮栄一・森岡巌　編『日本基督教団 50 年史の諸問題』新教出版社。
―小柳伸顕.(1993).『風と大地と太陽と―アイヌ、中南米、釜ケ崎』日本基督教団出版局。
―小柳伸顕.(2009).「共なる神」,『低きに立つ神』コイノニア社。
―関田寛雄.(2003).『断片の神学』日本基督教団出版。
―戸村政博.(1992).『路上の生―山谷から』日本基督教団出版局。
―朴聖焌.(1997).『民衆神学の形成と展開―一九七〇年代を中心として』新教出版社。
―原誠.(2005).『国家を越えられなかった教会―15 年戦争下の日本プロテスタント教会―』日本基督教団出版局。
―渡辺英俊.(2009).「地べたに在す神」,『低きに立つ神』コイノニア社。
―鈴木大拙.(2010).『日本的霊性　完全版』角川書店。
―弓山達也.(2010).「スピリチュアリティ」, 星野英紀・他　編『宗教学事典』丸善。
―Dorr, Donal. (1985). *Spirituality and Justice*. Quezon City, Philippines.
―Gutierrez, Gustavo. (1988). *A Theology of Liberation: History, politics and Salvation*. New York.